

【お香と植物③】

イエスも用いた、独特の香りを持つ「甘松」

お香の原料は中国や東南アジアなどで採れる植物です。お香は仏教とともに日本に入ってきて、当初は供養のために用いられていましたが、次第に、複数の原料を混ぜ合わせて香りを楽しむようになっていきます。

今回ご紹介する「甘松（かんしょう）」という原料は、甘いという名前に反してけっこうクサイです。不思議なもので、誰もが好む原料だけを混ぜ合わせてお香を作っても、香りに趣や奥行きが出なかったりします。甘松のように単体ではクサイ香りを加えることで、お香の出来栄がぐっと良くなるのです。



甘松はどんな香りかと言うと、「湿った土のような」「獣臭いような」もしくは「足の裏のような」、そんな動物的な香りです。私の授業でお香の調合を行った際には、複数の生徒から「カブトムシの匂いだ」という意見をもらいました。現代人からはちょっと忌避されがちな甘松ですが、江戸時代以前のお香では今より多めに配合していたようです。

甘松はオミナエシ科の多年草の根茎で、ヒマラヤや中国の山岳地帯で採れる高山植物です。洋名をスパイクナードと言い、西洋圏でも古くから重宝されてきました。新約聖書に「ナルドの香油」として登場するのが、甘松のことだと言われています。

聖書には、イエスの磔刑が迫った時、マグダラのマリアが高価で貴重なナルドの香油を買い求めてイエスの足に塗り、それを自身の髪で拭いたと記されています。（原典によっては、イエスの頭に注いだというパターンもあります）。この行為は、死にゆくイエスへの感謝や献身の表現でした。

甘松には鎮静作用があります。この香りが好みに合う人は、甘松が入ったお香やアロマオイルを使ってみると、リラックス効果が得られると思います。

(Inoura)

【冬の句】

银杏の景電飾ほどに散り残り

花枇杷に寄ればもぐらの塚踏んで

蟻塚の如くに枇杷の花の跡

よぢりたる体のひかり寒の鯉

もうこれが最後の授業冬木の芽

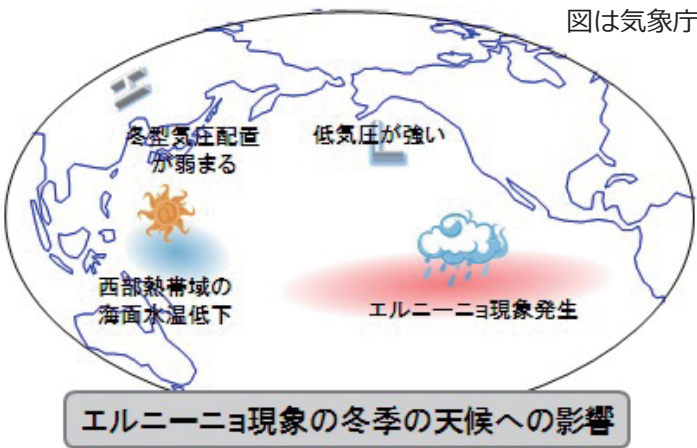
(Maekita)

大寒（二十四節気）になり、さすがに寒い日々が続きますね。しかしこの冬は寒い日があっても長くは続かないことが多いです。気圧配置でいえば冬型がずっと続くことはなく、日本海で低気圧が発達すれば、先週もあったように最高気温が三月並みになります。また、この時期に日本の南岸を低気圧が通過すると、寒気の南下とともに関東地方でも大雪になることがありますが、先週末の南岸低気圧では寒気の南下が弱く、雨となりました。先週末の関東地方南部では、降水量が20～30mmのまとまった雨が降り、空気を潤してくれました。もしこれが雪だったら20cmを超える積雪で大騒ぎになったかもしれません。

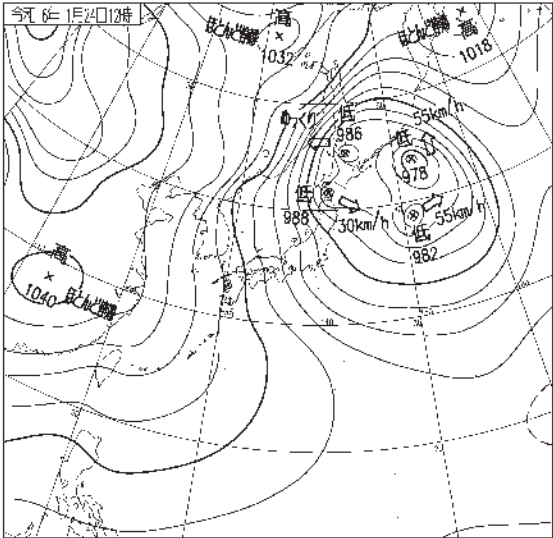
昨年春からエルニーニョが続いています。気象庁の予測では今年の3月くらいまで続く見通し（80%の確率）です。一般にエルニーニョ時の日本列島は「冷夏暖冬」傾向です。気候予報ではこの冬は暖冬の予想で、実際にその傾向が続いています。エルニーニョの時（いろいろ説明を省きますが）日本の東にある低気圧は平年よりも東にあるため（下図）、大陸の高気圧との間にできる気圧勾配が小さくなります。寒気の吹き出しは弱まり日本列島は温暖になります。

私はそれに加え、近年の北極圏の温度上昇の効果があると考えています。北極の平均気温は世界の他の地域に比べて倍の速さで昇温しています。特に冬の気温の上昇する割合は高く、アラスカやカナダ西部の冬の平均気温は、この50年間で3～4℃上昇しました。このことは赤道域と極域の温度差が、とりわけ冬に小さくなることを意味します。南北の温度差が小さいとどうなるか。赤道域の暖かい空気と北極の冷たい空気の間に吹く偏西風の波動が、南へ北へと大きく蛇行して進むことになります。この結果、暖気と寒気が目まぐるしく入れ替わることになり、これはまさに冒頭の「寒い日があっても長くは続かない」ということになります。

さて、2月4日は二十四節気の立春。もう春はすぐそこです。



図は気象庁から引用



2024年1月23日12時の天気図

(Higuchi)

カタバミの高温化への適応進化

カタバミという植物を知っている人は、緑色の葉と赤色の葉があることに気づくことが多い。そして、赤色の葉は「新芽」で、成長すると共に緑色に変わると信じている人も多い。しかし最近、赤色の葉はヒートアイランド現象への適応進化の結果であることが明らかになった（SCIENCE ADVANCES, 20, Oct. 2023, Vol.9, Issue 42）。都市部とその郊外で比較すると、都市部に圧倒的に赤色個体が多いのである。また、高温環境下では赤色個体の方が成長量において有利だった。赤色個体をゲノム解析した結果、赤色個体が突然変異で現れて、東京中に急速に広まったわけではなく、複数の地域でかつ異なるタイミングで進化が起こったことも明らかになった。そして、別々の集団間での移動や交配が頻繁に起こっている。赤色化は昆虫の繁殖など、周囲の生態系にも影響があると考えられる。ヤマトシジミというチョウの幼虫はカタバミのみを食べるが、産卵すべき葉の色が変わった時に適応できるか否かは今後の研究の結果を待つ必要がある。

これらの研究はまだ途上にあり、かずさDNA研究所を中心に「みんなでカタバミプロジェクト」なる市民参加型の研究が進行中である。貴君らも参加することができる。まずは、ウェブサイトを見てみてはどうだろうか。



(Miyahashi)

今年度、3年生は東北への見学旅行で岩手・中尊寺金色堂を訪れたが、そこで見た仏像を憶えているだろうか。1月23日から上野の東京国立博物館に、その金色堂の仏像32軀のうち11軀がやってきている（4月14日まで）。現地ではやや遠かった仏像たちが、いまなら東京で間近に見られるのだ。金色堂の創建は1124年、ちょうど900年前の出来事で、これを記念した特別展である。仏像も12世紀の製作で、同じ時代に都で作られた仏像と比べても遜色ない整った造形は、そうした技術者を都から呼ぶことのできた藤原清衡（1056-1128）の政治力と経済力を示している。ただ、そう言われても、それ以前の東北で作られた仏像を知らなければ、その力を実感するのは難しいかも知れない。

東京ではいま、東北の仏像を紹介する展覧会がもう一つ開かれている。東京駅丸の内駅舎内にある東京ステーションギャラリーで開催中の「みちのく いとしい仏たち」である（2月12日まで）。展示のメインは江戸時代の仏像でこれも面白いが、会場には青森との県境も近い岩手・天台寺から、11世紀の像が2軀出陳されている。このうちの1軀（右写真）と、金色堂の仏像（左写真）を比べてみよう。

いずれも「さとりに」到達した存在、「如来^{にょらい}」をあらわしたもののだが、「如来」には普通の人間とは違う身体的特徴がある（と信じられた）。例えば「肉髻^{にくけい}」。智慧をそなえた如来には、髻（長い髪を頭上で束ねたもの）のように見える肉のこぶが頭頂にある。また、髪の毛は1本1本が螺（巻き貝）のようにカールしていて「螺髻^{らぼつ}」と呼ばれる。仏像がパンチパーマのように見えるのはそのためだ。金色堂の像を見ると、お椀を伏せたようなかたちの肉髻に、粒状の螺髻が丁寧にあらわされている。一方、天台寺の像は頭頂がやや尖るだけ。全身にまとう衣も、金色堂の方は自然な皺をあらわすが、天台寺の方には皺がまったくない。ともに木で作られた像だが、中尊寺の方は表面に漆を塗って金箔を貼って仕上げているのに対し、天台寺の方は素地のままで、ノミの痕をかなりはっきり残している。

天台寺の像は、完成度の高さでは金色堂にとっても及ばない。藤原清衡が東北の仏像の水準を一気に引き上げたのである。ただ、どちらが「みちのく」らしい、その土地ならではの造形かといえば、間違いなく天台寺の方だろう。天台寺の像のかたちは、都とは違ったかも知れない、当地の人々が信じたホトケの姿を今に伝え、千年近く人々の祈りを受け止め続けてきたのである。

年明けから、岩手・陸前高田市立博物館のTwitterが能登を励ます投稿を続けている。2011年の震災で甚大な被害を受けた博物館の言葉は重く、優しい。「歴史を守ることはふるさとを守ること」。いま東京からは不便な「僻地」に見える土地にも、かけがえのない文化と歴史がある。その価値について、あらためて思い巡らせたい。



阿弥陀如来坐像 中尊寺金色堂
(東京国立博物館ウェブサイトより)



如来立像 天台寺
(展覧会図録『特別展平泉』二〇〇八より)

【オオイヌノフグリ】

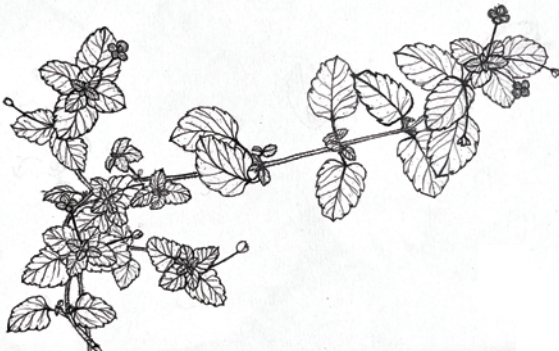
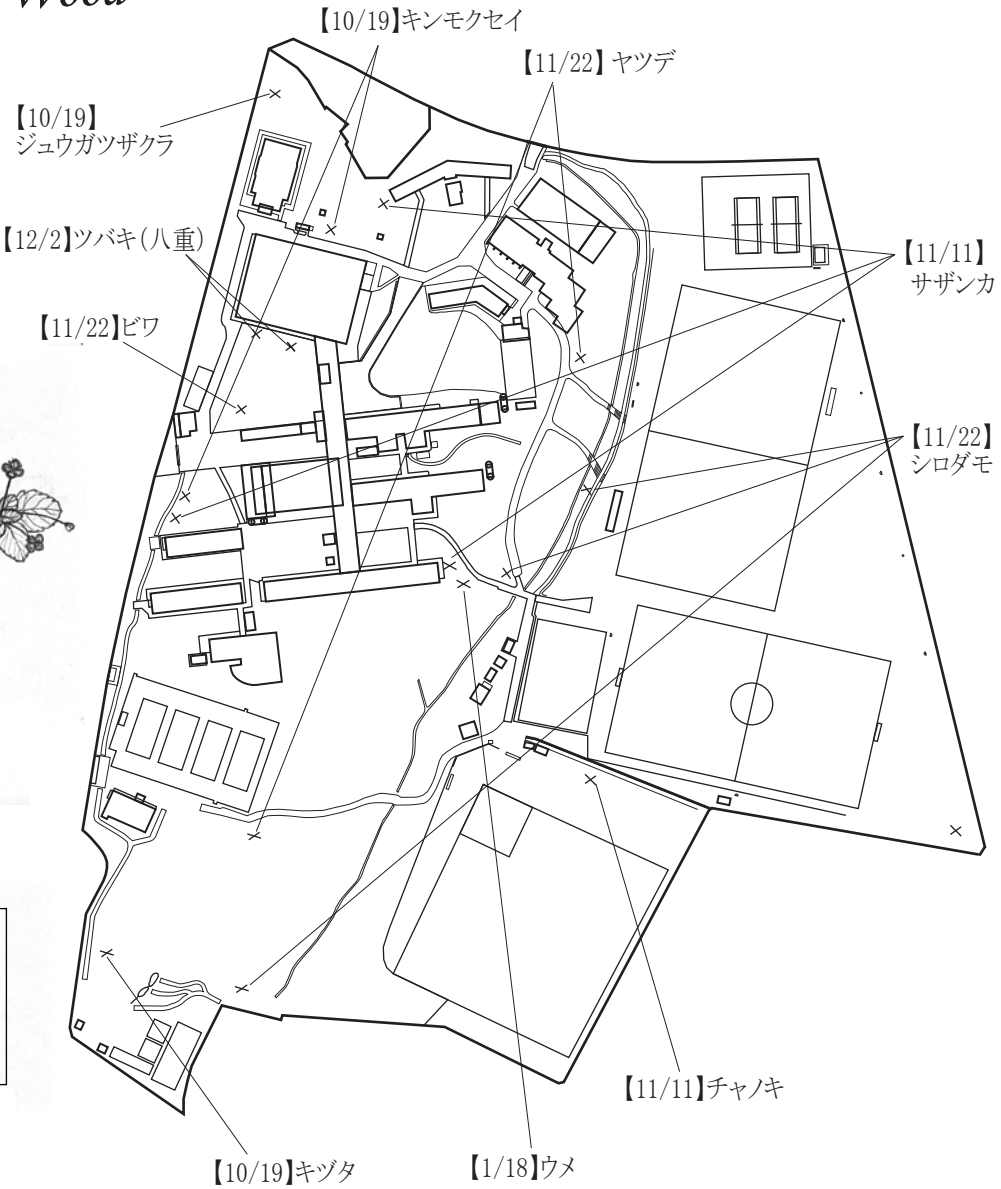
春を代表する野草であり、1887年頃、牧野富太郎らが東京に帰化しているのを初めて確認した．一般的な図鑑には「花期：3～4月」とされているが、本校では12月くらいから開花しているのを見かける．オオバコ科（かつてはゴマノハグサ科に分類）には、イヌノフグリ、タチイヌノフグリなどがあるが、いずれも花が超小型であり、容易に区別がつく．オオイヌノフグリの花もφ10mmにも満たないが、コバルトブルーの花弁をつけ、細くて目立たない雌蕊、それに対してやや太めで肉眼でも目視できる葯を持つ2本の雄蕊を持つ．虫媒花だが（蜜を出す）、自家受粉も可能である【出典：野草大図鑑（北隆館）ほか】．

[2023年10月～2024年1月までの開花情報]

Grass

- 19. Oct カントウヨメナ、セイタカアワダチソウ、ツルドクダミ
- 11. Nov ホトギス
- 2. Dec ミドリハコベ、ナズナ、ホトケノザ
- 14. Dec オオイヌノフグリ、ムラサキサギゴケ
- 7. Jan ハキダメギク
- 18. Jan ヒメオドリコソウ

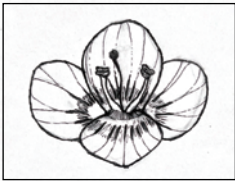
Wood



【拡大図】



果実



花

【オオイヌノフグリ】
オオバコ科クワガタソウ属

(Miyahashi)

この限られた紙面では、名前の出ている植物や動物がどのようなものであるかをお示しする事は不可能です。
名前を手がかりにぜひ図書館などで一度調べてみてください。

執筆・担当区分	天文・気象	樋口 聡 (Higuchi)
	歴史・美術	原 浩史 (Hara)
	俳句	前北 馨 (Maekita)
	風習・文化	井之浦 茉里 (Inoura)
	植物・地質 他[&発行責任]	宮橋 裕司 (Miyahashi)
	編集・植物画	荒巻 知子 (Aramaki)